

# 「李朝工芸」で思った事



十五代 沈 壽官

ソウルを訪れると、ソウル市立工芸館や長安坪の骨董街を見て歩く。

古物の真贋を見分ける力が無いので、購入する時は専門家と訪ねるようにしている。

先日、韓国を訪問した折、慶尚南道の昌原市の熊川を訪ねる機会を得た。

「李朝工芸」と言っても、僕に多少分かるのは焼物だけである。

勿論、家具や民画、刺繍、農機具なども好きだ。家具は金物が少なく、良い家にあつた物がいい。漆を使わず裏まで油で拭きあげている。金具の種類で産地が分かるのもいい。良く干し上げた松材を使っているが、痩せた土地での成長の苦勞が年輪から伝わってくる。民画も独特の絵画様式があり、その剽けた所が彼等らしい。刺繍は圧巻だ。陶磁器に月明の美を求める彼等が、一転鮮やかな色彩を紡ぎ出す。

私の初代、沈当吉が慶長の役の際（1598年）に日本に移住した後、およそ17年の歳月を経てようやく白い焼物を島津公に献上したところ、「まるでコモガイの様である」と大層喜ばれたと伝えられている。

この「コモガイ」とは、当時朝鮮陶磁全般を指す言葉だとは知っていたが、語源は何だろうとずっと考えていた。

朝鮮半島南部で焼かれた質朴で大らかな焼物達は、現在の昌原市熊川港から日本に送られた。

私は、今回この熊川が、「コモガイ」ではないかと考えた。

「熊」は韓国で「ウン」とも読むが、「コム」とも読む。又、「川」は「チョン」だが「河」は「ガン」と読む。

つまり熊川を熊河と当てると「ウンチョン」が「コムガン」となる。

有田焼が伊万里港から出荷された事から伊万里焼と呼ばれた様に、朝鮮陶磁も「コムガン」の名前で呼ばれたのかもしれない。当時は平気で当て字を使う。実際、この辺りからは、まるで萩焼か唐津かと思まがう様な陶片が出土する。

この熊川港から民窯で焼かれた大量のサバル（万能碗）が日本の茶人、とりわけ「草

庵の茶」を志向した村田珠光や武野紹鷗、千利休らによって、見立ての世界で名器となっていく、そう勝手に考えながら美しい海の景色を眺めてみた。

そういえば、李朝工芸と言えば、忘れてはならないのが、柳宗悦、浅川兄弟であろう。

彼らは、その当時韓国で評価のあまり高くなかった李朝工芸の美しさを見出し、現在の評価の礎を作った。

よそ者は良いとこ探しの名人だ。

土地の人が当たり前、つまらない物と思う物を面白がる。それが新しい局面を作る。彼等の心情の底辺には、武断政治を行う日本政府に対する反発と朝鮮の人々を分け隔てなく愛する寛容さがあった。

ソウルの東、萬憂里の共同墓地にある浅川巧の墓に詣でたが、その命日には多くの陶芸家や林業関係者が居たのを記憶している。韓国の工芸をこよなく愛した日本人は、海峡を越えていまだに慕われている。

韓国の尊敬する先輩の言葉を思い出した。

「日帝支配36年は暗黒の時代だった。しかし、清流の様な日本人も数多くいた。彼等の存在まで黒く塗りつぶすことが韓国の為になるのか？」と。

彼は大邱の水崎林太郎の墓守をしていた。その彼が地元の韓国の青年達に語った言葉だ。

